

次のようないくつかの意義をもつたと思われる。

### △余田報告にたいする討論▽

余田報告は、自らの研究歴に則して、戦後村落研究史に間接的に言及してゆく形で行なわれた。研究歴の最大の力点が会員の「溝がかり」制の発見におかれたことはいうまでもない。この「溝がかり」は、周知のように、『共同体の基礎理論』の「混在耕地制」に深い理論的な示唆をうけており、この概念を基礎とした村落社会理解は、

第一は関西（あるいは西日本）の村落の類型的構造把握への貢献である。「溝がかり」制度は、関西村落が近世中期以来フラットな社会関係を発達させながらも、予想外に村落規制の強い点に注目し、この点を理論化したものだと報告された。これとの関連では、その後、会員や竹田聰洲氏らがとりくんだ同族村落研究、鈴木栄太郎、福武直氏らの講中集団・講組結合研究が、関西型村落の類型的特徴のどの点をあきらかにし、「溝がかり」とどうかかわるのか、という問題提起の質問が松本会員よりなされたが、フラットな関係を基礎条件とした同族や村落の規制、編成をもつて関西（西南日本一般）の村落の類型的特徴をみると、共通了解がえられたと思う。

第二の貢献は「むらの解体」論への批判である。ここでは「溝がかり」論は単に西日本村落の類型把握であるというより、日本の村落の特性把握の一般理論としての側面をも持っている。会員は、今日でも米の单作村ではとくに末端水利の管理に典型的に、「溝がかり」規制が生きており、水利とこれに関連しての土地所有の規制が生きている限り、むらは健在で解体はしていないと主張された。これは若手会員の質問の主旨（平地農村の兼業化、行政主導の管理化により、「溝がかり」規制は変化するのではないか？）に対する答でもあった。ただし会員は「いえ」は解体したことは認められた。会員は農民層分解論で「むら」を斬れなかつた苦い自らの経験をふまえ、農民層分解にもかかわらず、「むら」の原理は依然生きていると主張される。しかもこの「むら」は、一昔前の「いえ」→「むら」

的な意味での“むら”ではなく、“いえ”崩壊後も健在する“むら”である。今日も根強いむら組織の持続性の積極的根拠を“溝がかり”論は提供している。

第三は、以上を通じて、余田理論が北海道、東北、東京などと少し味わいのちがう関西の村落研究の風土の一柱を形成していることである。たとえばその風土の一端は、村研の共通テーマへの不信感・批判の表明になつたりする。村落の基層の文化様式を村研が十分ふまえないことへのいらだちであろうかと思われる（もっともそれは一因にすぎないかも知れない）。

余田報告をふまえて議論は“むら”内構造と“むら”外関係の問題に及んだ。質問に答える形で会員は、農民層分解、都市との関係、社会変動等に関するいくつかの事実認識を示された。この過程で若手会員からは、一方で村研の共通テーマへの反発とフォーク・ロアの重要性を主張する意見、他方で平地村落の変動過程、むら外システムとの関連の重要性を主張する意見が出された。村落研究の世代交替にともない、村研の遺産としての問題关心の継承の仕方が問題となつて来つつあることを示す、両方向の代表的意見であったかと思われる。

残念ながら関西地区は、村落研究者が関連専門領域に広く存在し連携を保ち研究活動をする状況なく、この点で人材不足現象を否めない。このことは関西における村落の社会的地位ともかかわっていることだろう。村落研究の活性化のためには、今後都市近郊を含む平地農村の労働と生活の変化に直接きりこんでゆくような方向が

期待される。おそらくこれなしに村研共通テーマの問題関心とのクロスはありえないだろう。

（北原 記）